

二首ともに、雁をよんでいる。

春立てば花とや見らむ白雪の
かかれる枝にうぐひすの鳴く (万葉)

雪のうちに春は来にけりうぐひすの
凍れる涙今やとくらむ (古今)

うぐひすの涙のつらうちとけて
ふる巢ながらや春や知るらむ (新古今)

上掲の三首は、うぐいすをよみ、現実的、理知的、直観的などのとらえ方の対称はみごとである。

(2) 「うぐひすの」の場合

うぐひすの涙のつらうちとけて
ふる巢ながらや春や知るらむ

この歌は、古今の〈春のうちに〉を本歌としている。特に、新古今などで、本歌取りの歌と本歌の場合、その数似点の多さが、両歌の発想のちがいを鮮明にするうえで、恰好の学習である。

以下、一例を示す。

くるしくも降り来る雨か三輪が崎
佐野の渡りに家もあらなくに (万葉)

駒とめて袖うちはらふかげもなし
佐野のわたりの雪の夕暮 (新古今)

前歌は、作者その人の苦しみを歌っており、後歌は、佐野のわたりの雪の夕暮れの景を描いたものとなっている。現実的とらえ方、絵画的風景としてのとらえ方、完全な発想の相違は明瞭である。

(3) 比較の種類

(1), (2)で、素材の類似したものでの事例をあげたが、次のような比較学習の観点が考えられよう。

- ① 同じ着想にもとづく作品の比較
- ② 同じ心情を、異なる立場からよんだ作品の比較
- ③ 同一作家の作品で、内容的対立を示す作品との比較
- ④ 同じ素材の他の作品形態との比較
- ⑤ 贈と答の関係にもとづく比較
- ⑥ 漢詩との比較

などが考えられよう。以下、それぞれの事例を示す。

①の例

秋の野に人まつ虫の声なり
われかと思いきとぶらはん (古今)

女郎花多かる野辺に宿りせば
あやなくあたの名をや立ちなむ (古今)
〈ともに擬人化の歌である。〉

②の例

蘆垣の隈所に立ちて吾妹子が
袖もしほほり泣きしぞ思ほゆく妻を思う夫の歌>

防人に行くは誰が夫と問ふ人を
見るが羨しさ物思ひもせずく夫を思う妻の歌>

父母が頭かき撫で幸くあれて
いひしげとばせ忘れかねつる<親を思う子の歌>

家にして恋ひつつあらば汝が佩ける
大刀になりても齋ひてしかもく子を思う親の歌>

③の例

瓜食めば子ども思ほゆ粟食めば
ましてしのばゆ…… (憶良)

士やも空しかるべき万世に
語りつぐべき名は立てずして (憶良)

④の例

いそのかみ古りにし人を尋ねれば
荒れたる宿の董摘みけり (新古今)

つばなぬく浅茅が原のつぼすみれ
今さかにもしげきわが恋 (万葉)

妹が垣根三味線草の花咲きぬ (蕪村)

つと立ち寄れば、垣根には、露草の
花咲きにけり。さまよひ来れば夕雲の
これぞこひしき門辺なる。(藤村)

⑤の例

人はいさ心も知らずふるさとは
花ぞ昔の香ににほひける (古今)

花だにも同じ香ながら咲くものを
植ゑけむ人の心知らなむ (古今)

⑥の例 ——省略——

VII おわりに

今まで述べたことは、この春まで、実際に授業の中で実践したのものであるし、観念の実践の例も含まれている。

文学教育の場合、以上の比較学習が、とかく、理に陥る弊には、じゅう分に配慮されねばなるまい。

今後、更に整理、検討を加える必要がある。